

I

呼び鈴がけたたましく鳴らされ、私はコカ・コーラの瓶とコンビーフ・ハツシユの大皿を右A卓に、潰したじゃがいもの大皿を左D卓に置いて、音のした方へ向かった。つま先でターンすると、U.S.ARMYのロゴ入りエプロンの裾がひるがえる。

アメリカ軍の慰安用兵員食堂「ファイフティ・スターズ」は夜のパーティムとあつて盛況だ。昼間は作り置き料理で大食らいたちを迎える配膳カウンターはバーになり、普段の芋洗い状態が嘘のようにしっとりした雰囲気の中、白いクロスをかけた丸テーブルが澄まし顔で並んでいる。濃い青色の照明にミラーボールの銀がきらめき、ホールの中央で女性と頬を寄せ合い踊る軍服姿の男たちの顔や体に水玉模様を落とした。ウエイトレスの私が空いた席のグラスや皿を片付けていると、再び呼び鈴が鳴った。尻が椅子からはみ出さんばかりに大柄なアメリカ兵が、太い指をくいくい曲げ、早くこっちへ来いと急かすの見える。私がようやく奥B卓に着くなり、ミラーボールのせいで顔がまだらのそいつは、牛が草を食べるように唇をもごもご動かしてこう言った。

「あの黒髪の姉ちゃんは何時に仕事を終えるんだ？」

ここで働きはじめてまだ五日も経っていないのに、この質問はもう三度目だった。「黒髪のお姉ちゃん」は同僚のウエイトレス、ハンネローレのことを指す——彼女はちょうど右C卓で別のアメリカ兵の手の甲をつねっているとこだ。

「ご注文はお食事とお飲み物のみです」

ため息交じりに答えると、両隣に座っていた仲間の隊員が笑い、冷やかした。私は彼が怒り出す前に急いできびすを返したが、案の定、背後から罵声が追いかけてくる。

「気取りやがってナチ女が！」

「その頭にぶら下げてんのは豚の尻尾か？　ブスのデブめ」

笑い声がどつと続く。私は豚の尻尾と蔑まれた自分のお下げを握りしめながら、大股でフロアを横切った。あいつだつて牛みたいなくせに！　私は「ナチ」じゃない。でもあの人たちにとつてドイツ人はみんな同じなのだ。

正面のステージでは黒いドレスをまとつたドイツ人の歌手がドイツ人の楽団を従えて歌っている。でもその後ろに掲げられた大きな旗は星条旗だ。しましま模様を星をちりばめた、おもちゃの包装紙みたいなアメリカの国旗。

この地区を仕切る国家はドイツじゃなくて、アメリカだから。

安っぽいプレハブの兵員食堂がここに出来たのはつい一週間ほど前のことで、まだ接着剤やおろしたての資材の、化学的なにおいがする。アメリカ兵コックに混じって、私のような程度

の英語が話せるドイツ人従業員が働いている。ようやく閉店時間になり、コーン油のむわつとしたにおいや茹でたじゃがいものにおいから離れ、ひと息つくために厨房の裏口から外へ出る。

「*sewerage*」の意味がわからなかったからって、あいつらあたしのこと馬鹿だと思ってるの。そっちこそドイツ語でしゃべれって話よ。所詮、自分のところの言葉しか話せないくせに」

すでに休憩中だったハンネローレが他の数人のウエイトレスと愚痴を言い合っているのが聞こえてきた。青色の闇に浮かび上がった彼女たちの影に、客からももらったらしい煙草の赤い火がぼつぼつと点る。ハンネローレは私に気づくと、「ラッキーストライクだよ」と煙草を一本くれた。白くすりりとしたアメリカ製のそれを、私はポケットに入れて明日にでもマッチと交換しようと思つた。家のマッチがそろそろなくなりそうだから。

「おい、君たち！ こっちを手伝ってくれ！ 支給品が届いたんだ！」

私たちを呼ぶ洋なしのような顔の人、マクギネス特技軍曹はこのコック長だ。

食堂裏の巨大な貯蔵庫へ行くと、輸送トラックはすでに出発したところで、搬入口の前に大量の木箱が積まれていた。側面に捺してある品名の黒いスタンプをひとつひとつ読みながら、置き場所を間違えないように運ぶ。何十個目かの箱に取りかかろうと屈んだ拍子に、そばの茂みの葉と葉の隙間から、子どもの顔が見えた。その視線の先には搬入が遅れたらしい木箱が一箱、ぼつんと置いてある。私は気づいていないふりをして、自分の分の荷物を持ち上げ、貯蔵庫へ運んだ。朝から晩まで働きづめ、明日のためのじゃがいもの皮を剥いてようやく仕事を終えたのは、夜の十時を回る頃だった。他の人と共同で使っているロッカーを開けると、私の上着がきちんと待

つていた。何もかもが足りない今のこの国では、人のものを奪って生きることがあたり前で、盗み在日常茶飯事になっていた。二日前には厨房に忍び込もうとした男性が憲兵に捕まったし、さつきは子どもが——私は首を横に振って考えるのをやめ、支給品のエプロンを外してロッカーに掛けて、上着に腕を通した。上着は羊毛製で分厚く、真夏だから本当は脱ぎたい。でもやがて必ず来る冬を上着なしで過ごすわけにはいかないので、身につけている。自分の体が一番信頼できる金庫だから。ロッカーの扉を閉め、腕に白いハンカチを巻き直す。私は降参していますの証として。

足はだるく、腰が痛かったけれど、右手に抱えた紙袋の重さが嬉しかった。中身は砂糖と塩の包みがひとつずつ、それに本物の小麦粉とココア。マクギネス特技軍曹が「こいつは不良品だな」と紙袋に入れてくれたのだ——おどけたウインクつきで。

嫌なアメリカ人もいれば、優しいアメリカ人もいる。悪い人間といい人間。そして大部分の、どっちでもあり、どっちでもない人たち。

じゃあ私自身はどうなのか？ 少なくとも、天国へ行ける善人だという自信はなかった。

太陽はまだ沈んだばかりで、停電時間中でもほのかに明るく、瓦礫がごろごろ転がる道でもつまずかずに歩けた。薄くなった靴底越しに、ごつごつしたモルタルやコンクリートの感触が伝わってくる。開けた空き地には、建設中のプレハブが星条旗を翻していた。

夏の長い長い夕暮れが、そろそろ終わる頃だった。昼の青空よりも暗く、真夜中の漆黒の空よりも明るい、まるで貴婦人の胸元に輝くサファイアのような青い闇が、廃墟の上をどこまでも広

がっている。先月は夏至だったけれど、まだ粉塵が漂うこの街で、夏の到来を祝った人は誰かいただろうか。

外出禁止時刻をとくに過ぎ、私の他に歩いているドイツ人はほとんどいない。アメリカの将兵やその家族たちが暮らす地区から外れると、たちまち人の声や物音が聞こえなくなり、心細さと安堵が相俟^{あいま}って、少し早足になる。

一日の半分を豊かで満ち足りたアメリカの施設で過ごししていると、つい祖国の敗戦と惨めな状況を忘れてしまいそうになる。立ち止まってあたりを見回せばすぐに現実に戻るというのに——来た道を振り返れば電気の明かりがきらきら輝いているけれど、帰路に視線を戻せば光のない灰色の街が広がっている。空襲で焼けた発電所の復旧が遅いために慢性の電力不足で、特に夜は順番で停電することになっているからだ。そして浮いた電力は占領軍に回される。彼らの居住区はいつだってきれいで明るい。ドイツ人が抗議したところで、発電所に爆弾を落とされるようなことをしたせいだからと一蹴^{いっさく}されておしまいだろう。

顔を上げると、広告塔にかかったものはやドイツにはいかなる政府も存在しない^グという横断幕が風に揺れた。

二ヶ月と少し前、アドルフ・ヒトラー総統が国民を置き去りにして自殺、私の祖国ドイツは降伏し、戦争に負けた。

すでに空襲でぼろぼろだった街に勝者が押し寄せ、国民の手から国が奪われるまで、本当にあつという間だった。ここ首都ベルリンは、ソヴィエト連邦、アメリカ合衆国、イギリス、そして

フランスの四ヶ国に統治され、ドイツ人に発言権はない。ドイツ人は敵だった国の命令を、幼い子どもみたいに素直に聞くしかなかった。

特に私は普通のベルリン市民より何倍も敵に従順だ。アメリカ軍に雇ってもらい、彼らが接収したツェーランドルフ地区の部屋に住んでいるから。

これまでドイツ人——というよりベルリン人は、アメリカが好きだった。おしゃれでお金持ちで、食べ物豊かで、音楽が素敵で、自由で、憧れていた。みんな「フランスやソ連は嫌なやつらでも、アメリカの好青年たちはドイツを悪いようにはしないはずだ」と期待していた。

私もそうだ。私は幼い頃からアメリカの小説やミッキーマウスが好きだった。隠れてでも英語を勉強した。だからアメリカがやって来た時、これで平和になると信じたし、すぐに彼らの従業員になりたいと志願した。

なのに、今は失望してばかりいる。

爆弾の炎がいかに街を焼き、醜い姿に変えようと、夏の青い夜は美しい。風になびく旗が、黒と赤のハーケンクロイツ旗だろうと異国の旗だろうと、自然の美は存在し続けている。

そう自分に言い聞かせながら歩いていると、道ばたの瓦礫と折れた鉄骨の隙間に、小さな花を見つけた。しかし花につられて屈んだその時、崩れた煉瓦れんがの間に渡したトタン板の下で、小さな子どもが、死んだまま置き去りにされているのが見えてしまった。何匹もの蠅がぶうんと翅はねを震わせ、私は慌てて飛び退き、大急ぎでここから離れた。手のひらで顔をぬぐってもぬぐっても汗が止まらない。

アルゼンチン通り沿いの自宅に着いた私は、正面住棟の鉄門に鍵を差し込んで押し開け、体を滑り込ませた。ベルリンの住居の多くは、ジードルングと呼ばれる集合住宅で、私がこれまで暮らしてきた家も、戦争中のほんの一時を除けば、ほぼジードルングだった。たいていは四階から五階建てで地下室があり、住棟は上から見ると口の形をし、真ん中は必ず中庭ホーフになっている。ベルリン市民は中庭が好きだから。

その先は正面住棟をアーチ型にくりぬいた通路になっている。靴音の反響を聞きながら石畳を歩き、花ではなく食べられる野菜が花壇に植えられた中庭を横切つて、奥にある第二棟の扉を開けて中へ入る。階段室エルクの電気は消えており、壁に取り付けられた燭台の橙色をした灯の下、仄暗い階段を登った。

帰宅すると、薄い壁を通じて隣人の怒鳴り合いが聞こえてきた。マッチを擦つて、この借り物の部屋に明かりを灯す。マッチ棒の残りはあと三本。さつきハンネローレにもらったアメリカ煙草一本で、マッチ箱の他に何を買おうかと考える。

私は琺瑯ほうろうのたらいと水道管がむき出しの蛇口という簡素な台所にもたれかかり、蛇口をひねつた。たちまち、ごぼごぼと音を立てながら水が流れ、塩素のにおいがつくと鼻を刺激する。断水状態の地区がまだ多い中、栓をひねればすぐ水が出てきてくれるだけで嬉しい。

私は上着も脱がず、肩掛け鞆も下ろさずに、アメリカ製の香料たつぷりの石鹼で顔や手を洗った。水垢みずあかまみれの鏡に映った私は、十七歳とは思えないほど老けて見える。丸い顔は疲れきつていて、腫れぼったい目の下には青いクマがある。髪も眉毛もぼさぼさ、唇はがさつき、頑固な口

角炎がまだ居座っていた。食堂で名も知らぬアメリカ兵から「ブス」と罵られたことを思い出し、ため息が出る。たとえばこの冴えない茶色の髪を染めて、肩ぐらいの長さまで切ってみようか、とこれまで何度か想像したことをまた繰り返し、虚しくなった。

夜になってもまだ暑い。着の身着のまま、体も洗えず、自分でもわかるくらいに汗臭かった。道ばたで拾ったブリキの洗面器に水を張ってベッドに腰かけ、素足を浸す。窓から差し込む月明かりが、まるで川を泳ぐ魚の腹みたいに丸々しくて生白い足を照らした。ところどころ靴擦れやまめができて、とりわけ右の踵ばかり赤くなっているのは、歩き方がゆがんでいるせいだと医者から言われたことがある。

いつの間にか隣室の怒鳴り合いは終わったようで、洗面器に揺らぐ水のちゃぷんという快い音がよく聞こえた。

私の部屋で生きているのは、私と、窓辺で育ちはじめたラディッシュ、それから何匹かの虫たち。ラディッシュは食堂勤務の初日にこっそり拝借した種を、闇市で買った割れてない鉢に植えたものだ。今は黄緑色の葉がよきよきと生え、外の様子を窺っている。

喧噪を離れ、部屋にひとりきりになると、自分という人格が体の中に戻ってくる。無理矢理身につけたお仕着せの衣を脱いで、ほっと息をつくような感覚。しかしそれに伴って、いろいろな感情や思考がどつとよみがえりそうになり、蜘蛛の巣を振り払うように首を振った。気を緩めると記憶はすぐさま心に入り込んでくる。けなげに咲いた花の後ろで死んでいた子ども。

何か気が紛れることを考えなければ。百から七を引き続けるとか、英語の詩の暗唱とか。

私はなんとはなしに、左肩から斜め掛けしている革靴の表面を手でさすり、バックルを外して蓋を開けた。中を覗くと、配給切符と報酬の連合国マルクの束の横に、黄色い本の背表紙があるのがわかる。この御時世に本を持てるありがたさと、苦い気持ちの間で迷っているのに、手は勝手に本を取り出してしまふ。

角が縫よれ、ほろほろになった黄色い本、『エーミールと探偵たち』。それもドイツ語の原書ではなく英訳版だ。一度私の手から離れ、もう見ることはないと言っていたのに、ほんの数日前にかつての知り合いが届けてくれた。ページをめくると、幼い頃の私がせっせとペンを走らせ書き込んだ、つたないドイツ語訳文が読める。

未来の見えない混沌としたこの街に暮らしながらドイツ人の私がアメリカ軍で仕事を得て、ちやんとした部屋に住めるのは、元をたどればこの本のおかげだ。それと隣人だったイツァーク・ベッテルハイムがくれた英独辞書。この二冊が私に英語を教えてくれたおかげ。

父さん、母さん、アッカー通りの粗末なジードルングで暮らしていたみんな。そして、小さなイード。みんななくなってしまう。私は誰も助けることができず、生まれた家も失い、思ひ出の欠片すら手元に残せなかった——この本以外は。

家族や友人の顔が脳裏をよぎり、しっかり閉じたはずの心の窓に、記憶という煙が入り込みかけたその時、誰かがドアを叩いた。

「開けろ、ここを開けろ！」

拳で乱暴に殴っている音だ。私はぎくつと震えて本を取り落とした。

「我々は合衆国陸軍憲兵隊だ。ここを開ける！」

慌てて本を靴にしまい、急いでドアに駆け寄って鍵を開ける。すると間髪入れずにドアが押し開かれ、咄嗟とっさに避けなければ顔にあたるどころだった。暗い廊下に、懐中電灯を手にした黒っぽい影がふたつ、ぬつと立っている。態度と同じくらいに体の大きいアメリカ兵がふたり、MPと書かれた黒いヘルメットの下から、冷たい目で私を見下ろしてくる。憲兵だ。押し寄せる不安を抱えて何を言われるか待っていると、くちやくちやくとガムを噛んでいる若い方が、ミントとヤニのおいが混じった息を吐きながら訊ねてきた。

「お前はオーガスト・ニッケルか？」

いいえ、ちよつと違う。私の名前はアウグステだ。アメリカ人はろくに発音できたためしがないけれど、訂正はとつくに諦めているので、黙もくつて領うけく。すると若い方の憲兵が懐中電灯の眩まはゆい光をこちらへ向けた。まるで尋問に来た秘密警察ケシニユケホのように。

「身分証を確認する。早くしろ」

「……その光を消して下さい。かえつてよく見えません」

手で目を隠しながら願ってみたが、下ろしてくる気はないらしい。仕方なく、なるべく目を細めながら上着の内側に止めたピンを外し、連合国軍発行の身分証とアメリカの就労証明書を取って差し出した。するとようやく白い光が逸れ、ちかちかする目を何度も瞬いて視界を戻さねばならなかった。若い方がさつと確認し、年長の方に回す。

「私はアウグステ・ニッケルです。今月の十日からガリー通りにある兵員食堂、フイフティ・ス

「タージズ」で働いています。何か……問題でも」

すぐに頭に浮かんだのは、食堂で私を罵倒したアメリカ兵の客が、苦情をよこしたのかもしれない、ということだった。もしクビになったらまずい。上司のマクギネス特技軍曹や同僚は優しいけれど、万が一あの客が将校だったら、言い逃れはできないかもしれない。階級章をちゃんと確認しておけばよかった。今、目の前にいるふたりは、若い方が伍長で、黙って身分証をこちらに返してきた年長の方が軍曹だった。

「あそこのウエイトレスだってのはわかっている。あんたは見栄えがしないからな」伍長はにやつきながら私を舐めるように見た。「逆に印象に残ってるよ。まあ太ってて、胸だけはありそうだが」

そう言うって私の胸に向かって手を伸ばしてきたので、ほとんど反射的に叩いた。これでファイフ・テイ・スターズの看板が遠のいた気はしたけれど、この人に触られるよりましだ。すると伍長は子どもみたいに怒り出した。

「このクソキャベツ女、ヒトラーの売女ばいたのくせにたてつきやがって！ その肩に掛けてる鞆は何だ？ どう見ても男物だろうが。いったいどこで盗んだ？」

「やめる伍長、彼女は我が軍が雇った従業員だぞ。それに俺たちの任務は彼女を逮捕することじゃない」

今まで一歩下がって傍観していた軍曹がやっと動き、私たちの間に入る。

「でも軍曹」

「でも」とは何だこのガキめ。他の住民を見張ってる。お前が騒ぐから注目されてる」

確かに向かいのドアの隙間から、穿鑿好きな隣人が顔を覗かせてこちらを見ていた。上官に叱られた伍長が「消灯時間はとつくに過ぎてるんだ！ 寝ろ！ さっさと寝ちまえ！」と、隣家や階段室の上下に向かって喚きちらすと、ばたばたとドアが閉まる音がした。八つ当たり中の伍長を横目に、軍曹があらためて私に向き直る。

「ミス・ニツケル、我々と一緒に来てほしい」

「こんな夜に？ 兵員食堂は閉まっていますけど」

「兵員食堂？ 違う、警察署だ。と言っても、うちのじゃない」

そう面倒くさそうに言う私の肩を押し、ほとんど強制的に家から出した。さっきの件じゃない？ 私はたまらずドア枠を掴み、両足を踏ん張る。

「ま、待つて下さい。もう少し詳しく教えてくださいませんか。いったい何の用で警察署へ行かなければならないんです？」

馬鹿にされないよう毅然としたいのに声が震えてしまう。こんなの、父がゲシユタポに連行された時と同じだ。党は消滅して、平和になったはずなのに。政治犯として収容所に入れられ、そのまま帰ってこなかった父のことが頭をよぎる。

すると軍曹は心底どうでもよさそうに言った。

「悪いがアカを恨んでくれ。君を呼んでいるのはやつらなんだから」

「アカ……つまり、ドイツ共産党のことですか？」

「残念だが外れた。ソヴィエトの連中だよ」

ソヴィエトと聞いた瞬間、ぞっと肌が粟立った。

「嫌です。ソ連のところには行きたくありません」

あの人たちとの繋がりがなくて、あの日、私の身に起きたこと以外に心あたりがない。ほんの数ヶ月前に彼らからどんな目に遭わされたか、もしその時の抵抗が原因で呼ばれているのだとしたら理不尽だと軍曹に打ち明けてアメリカの助けを求めようとした。しかし軍曹は聞く耳を持つてはくれなかった。

「ああ、赤軍兵が女性たちを強姦してまわった話は聞いている。珍しい話じゃない。悪いが君に拒否権はないんだよ。いいから早くしてくれ、こちら暇じゃないんだ」

真夜中、本物の黒い闇に包まれたアルゼンチン通りを、北東へ向かって走る。アメリカ軍のかの有名な「ジープ」は幌を開いていた上にドアがなく、まるで骸骨のあばら骨の中に座っているかのような、すかさずかした心もとない感じがした。風がまともに吹き込み、スカートの裾がひるがえってしまふし、押さえようにもどこかに掴まっていなと揺れたはずみに落ちてしまふそうで、恐ろしい。

運転席と助手席の憲兵たちは無言で、連行の理由を訊ねてみても無視された。軍曹のふかす煙草の赤い火が、ホタルのように闇に揺れる。緊張で冷たくなった指先を揉みながら、輝く月を眺めて不安を紛らわせた。

長い間——六年もの間、この都市で夜に光を見ることは、ほとんどなかった。空襲に備えた灯管制で、窓には分厚いカーテンが、車の前照灯には覆いがかけられたためだ。もし守らなければ地区防災責任者が怒鳴り込んできて、罰金を支払うはめになった。だけど今はたとえ建物が傾いていても、窓は開かれ、蠟燭ろうそくの暖かな橙色の火があちこちに浮かび、人々がここで生きているとわかる。

吹きつける風はうんと不潔に作ったアイントプフのようにごたまぜのおいがした。石炭が燃える煙たいにおい、じゃがいもや豆を煮るにおい、栄養失調のせいですさまじい腐敗臭を放つ排泄物のおい。生と死が放つ悪臭。そしてこのジープからは、甘ったるいくせにすうつとする、ペパーミント味のチューインガムのおいがする。

灯管制がはじまった年、つまり戦争がはじまった六年前の私はまだ十一歳で、それ以前のことはほんやりとして曖昧だ。私にとってベルリンは市ではなく、大管区グロウだし、夜の風景といえど、暗い道に夜間蛍光塗料の緑色がおぼろげに光る怪しげなものだった。

ほんの数ヶ月前まで街にはNSDAP、これからは進んでナチスと呼ぶべき党の赤い腕章をつけた党员たち、それにきつちりとプレスプレスの利いた黒い制服姿の親衛隊SSが大勢いた。しかし今、彼らの姿は消え去り、代わりに星条旗つきの軍服をだぶだぶとだらしなく着崩した「アミー」たちが、街をうろついている。

本来のベルリンはどこまでも真つ平らな街だった。でも今は、ジープは何度もはずんだり、急に曲がったりと、かなり蛇行しながら走る。石畳が悪路だけでなく、道に溢れた瓦礫はまだま

だ片付かず、あちらこちらで山となつて積まれているせいだ。運転席でハンドルを握る伍長は何度も舌打ちした。

一時間ほど走つただろうか。ようやく中央部^{ミツテ}にたどり着いた。賑やかだった通りが嘘のように、空襲や市街戦で方々が焼け崩れ、ほとんどの建物が無残な瓦礫と化していたけれど、それでも自分がどこにいるかはわかる。ネオンが消えてしまった映画館のウーファ・パラストの前を通り過ぎ、黒ずんだラントヴェーア運河を渡つた。もうすぐベントラー通りに差しかかる。私は急いで首をひっこめ、できるだけジープの外から自分の姿が目立たないように背中を丸めた。

私は赤軍兵と口をききたくなかつたからだ。このゲートの先はソヴィエト連邦の管理区域になり、近くにはかつての陸軍最高司令部を乗つ取つたソ連の最高司令部もある。

検問所が見えてくると、運転席の伍長はアクセルを踏んだまま、直進して突つ切ろうとした。しかし笛がけたたましく鳴り、道路を照らす投光器の光の中に赤軍兵が飛び出してきて、伍長は慌ててブレーキを踏む。

「おい、いい加減にしろよ！」

伍長は怒鳴つて威嚇^{いかく}しようとするが、ジープを止めた赤軍兵は無表情で、まるで意に介していなかった。頭に糊^{のり}の利^りいていないナプキンのようにべちゃんこな略帽を載せた、丸顔の東洋人歩哨^{ポウショウ}だった。ソ連軍にいる東洋人をみんなモンゴル人兵と呼んでいただけれど、本当のところはよく知らない。

「プロープスク」

「プロープ……? ああ、身分証か。そんなもんいらないだろ、どこの管理区域も行き来は自由なんだから。ああ、英語がわかんないのか」

小馬鹿にした態度を崩さない伍長に赤軍兵は更に詰め寄って、汚れた手のひらをジープの中に突っ込んでくる。不機嫌そうに唇をとがらせ、腫れぼったい目でこちらを睨みつける。金ボタン付の窮屈そうな詰襟は垢で黒ずみ、まだらになつていた。

「プロープスク」

「あのなあ、俺たちはあんたらに依頼されて来たんだぞ。さっさと通せよ」

外の様子を窺えば、十人近い数の赤軍兵がじつとこちらを監視していた。彼らは私にとって、アメリカ人よりもずっと未知の存在だった。軍人といえば一般人よりも素敵な制服を着ているものだと思つていたのに、東からやって来たこの人たちは、布の染料が足りなかったのか、微妙に色の濃淡が違う、毛玉だらけですり切れた薄っぺらいスモックやキルティングの上衣、汚れたままのズボン軍服と呼んでいた。肩には武骨で素朴な形のライフルを担いでいる。

「おい伍長、身分証くらい出してやれ」

「イエス、サー。わかりましたよ。つたく」

アメリカの伍長はぶつくさと悪態を吐きながら、運転席の下に腕を伸ばして何かを出そうとした。しかしその時、うっかりしたのかそれともわざとなのかわからないけれど、赤軍兵はライフルを肩から下ろし、銃口が伍長の顔に当たった。

後の展開はほんの五秒ほどのうちに起こった。頭に血が上りやすい伍長は、よせばいいのに、

ガンホルダーから拳銃を抜いて赤軍兵に突きつけてしまった。

軍曹が慌てて止めた時にはもう遅く、ジープをじりじりと取り囲んでいた他の赤軍兵たちまでも暴れ出し、腕が何本も伸びてきた。軍曹と伍長は服を掴まれ、英語とロシア語、そしてどこかわからない言語が入り交じった怒声が飛び、投光器の真っ白い光の下、黒いヘルメットが転がり、赤い軍帽が飛んだ。私も悲鳴を上げて目の前に迫り来る手を払いのけた——しかし軍人の力に敵うはずもなく無理矢理引きずり下ろされ、膝と手のひらを強かに打った。四つん這いになつたまま、そつと右手を開いてみると、手のひらが擦れて真つ赤になつていた。

後ろからロシア語でどやされ、襟元を掴まれて顔を上げれば、異国の男の瞳が私を覗き込んでいた。まるで獣のように粗野で獰猛な瞳。知らないにおい。意味のわからない言語——たちまちあの時のことが甦り、どつと汗が噴き出した。思い出したくない。思い出したくなかないのに！

その瞬間、一発の銃声が轟き、全員びたりと動きを止めた。

アメリカ軍のジープの前で、ひとりの軍人が右腕を高く挙げ、拳銃を空に向けていた。威嚇射撃だ。続いてもう一発、雷鳴のような轟音が響き渡り、私は体をびくりと震わせた。火薬の煙が闇の黒と投光器の白の境目にふわりと漂う。

ソ連の軍人に間違いはなかった。しかし他の赤軍兵とは明らかに雰囲気が違う。軍帽の黒い底と赤い帯は同じだけれど、山は目の覚めるような青色だった。ズボンも青く、上衣にはアイロンが利いてピンと張りがある。

突然現れた青帽子の男は他の誰よりも若く見えた。けれど彼が鋭い口調で何かを命じると、暴れていた赤軍兵たちは互いに顔を見合わせ、それぞれの持ち場へ戻っていった。まるでより強い群れの邪魔が入り不服そうな犬のようでもある。

それでもこの反応に満足したのか青帽子の青年は銃を腰ベルトのホルスターにおさめる。それとほぼ同時に傍らに停まっていた車のドアが開いた——ソ連の将官が乗る、いかにも高級そうな黒いエムカだ。中から現れたのは、同じ青色の軍帽とズボン姿の将校だった。将校は軍人にしては華奢な体軀だが、勲章が五、六個ほど左胸に輝いている。威嚇射撃を行った若者も素早く敬礼した。

地べたに尻餅をついたまま呆然と目の前で起こったことを眺めていたら、後ろでエンジンをふかす音がした。私をここへ連れてきたアメリカの軍曹と伍長はいつの間にかジープに戻り、タイヤを急回転させて後退すると、土埃を立てながら来た道を走り去った。

「待つて、置いていかないで！」

叫んでももう遅い。ジープは闇に消え、私はソ連の管理区域内にひとり取り残されてしまった。これからどこへ行けばいいのかもわからないのに。検問所の様子を窺うと、赤軍兵たちはジープが去ったことは気にとめず、あっさり任務に戻っていた。さっきまでの騒ぎが嘘のように平常で、私のこともどうでもよさそうだ。私はこの隙に家に帰ろうと腰を上げ、肩掛け鞆を腕に抱きかかえ、そつとここから離れようとした。しかし後ろから呼び止められてしまった。

「フロイライン・アウグステ・ニツケル？」

おそるおそる振り返ると、先ほど黒いエムカから降りてきた青帽子の将校が立っていた。

「安心して下さい。私は何もしない」

かすかにロシア語訛りが残るものの、将校は非常に流暢なドイツ語を話した。

「労農赤軍の同志が手荒な真似をして申し訳なかった。私は内務人民委員部、NKVDのユーリイ・ヴァシーリエヴィチ・ドブリギン大尉。あなたを迎えにきました」

間近で見ると、痩せた将校はまだ若く、二十代半ば程度ではないかと思つた。頬骨が尖つた精悍な顔立ち、鼻の下に黒い髭を生やし、灰色の瞳には鋭い知性の光があつた。私は鞆と一緒に逃げ帰りたい気持ちを抱えたまま、ドブリギンと名乗つた大尉の後について検問所を通つた。今度はおもう「プロープスク」とは言われなかつた。

エムカの横には先ほど威嚇射撃を行つた若い軍人が立ち、後部座席のドアを開けて待つていた。背が高く、肩幅もがっしりとしており、顔にはそばかすがあつた。

「彼はベスパールイ下級軍曹で、私の忠実な部下です。運転の腕は確かですよ」

ドブリギン大尉に紹介されたベスパールイ下級軍曹は、ちらりと私を一瞥し、早く乗れと言わんばかりに顎をしゃくつた。

暗い道走りながらも北東に向かつているのだとわかつたのは、荒廃したかつての大目抜き通りウンター・デン・リンデンから、黒々と流れるシユプレー川を越え、ベルリン大聖堂の焼けた天蓋が見えたからだ。左隣に座るドブリギン大尉の様子をそれとなく窺う。黒革の長靴には艶があつて汚れはなく、濃いカーキ色の上着も清潔そうだった。

じろじろ観察していると、灰色の瞳と視線ががち合い、慌てて逸らしたが、気づかれていた。

「エムカに乗るのははじめてですか？」

「……ええ」

「アメリカ・ニエツのジープより乗り心地がいいでしょう。これから向かう先は警察署ですが、不安ですか？」

ドブリギン大尉の口調は柔らかく、紳士的で、私はいくらか警戒心を解いた。

「はい……アメリカの憲兵は連行の理由を話して下さいませんかでしたので」

内心では、あの時のこと、市街戦の最中に私が殺した赤軍兵のことで連行されるのだと考えていた。

夜明けの前は最も暗いと言うけれど、終戦間近のあの日々は暗いどころではなく、生き地獄だった。国境の防衛戦を突破した赤軍兵にとっては、憎い敵国の女なんてただの穴の空いた温かい袋としか思えなかったのだろう。

あの日、隠れていた地下壕から赤軍兵の乱暴な手で引きずり出された女たちの中には、八歳の女の子と八十歳のお婆さんがいた。私も例外にはなれなかった。あれが起きるまでは月経なんて煩わしくて憂鬱な厄介者だと思っていた。六月の月上旬にふたたび血が出てきた瞬間、私は嬉しくて泣いた。病院で看護師からもらったカーテンの切れ端を股にあてがいながら、とっくの昔に嫌いになっていた神様にありがとと呟いた。

あんな惨めな思いはもう二度とごめんだった。

私はあの時、襲いかかってきた赤軍兵のライフルを奪い、無我夢中で彼の喉を撃ち抜いた。珍しいことではない、なにしろ市街戦の只中での出来事で、彼はこの最中、ずっと私の顎の下にナイフを突きつけていた。やらなければ私が殺されていたかもしれない。現に、強姦の挙句、命まで奪われた無残な女性の死体を見たことがある。私たちは敵同士だった。戦争だったのだ。

しかし戦争が終わった今、ドイツ人は戦中の行為で罪に問われるようになり、私も他の人と同じく逮捕されるのだろうと思った。

けれども大尉の様子には違和感があった。

「それはそうでしょう。アメリカ軍には必要最低限の情報しか与えていませんから。赤軍にも軍政府にすらも明かしていません。今回の事案は私自身が直接管轄しています。間もなく到着しますので、今しばらく辛抱して下さい」

辛抱。もし私を同胞殺しだと思っているなら、こんな言い方をするだろうか。もやもやした疑問は解消されないまま、大尉の言うとおりでそれから十五分ほどで、東地区の大通りプレントラウアーベルクの警察分署に着いた。

両翼を広げた鷲とハーケンクロイツの彫刻の上には看板が重ねられ、太く大きなキリル文字で何ごとか書かれている。すぐ下に小さくドイツ語で、シュタットポリツァイ市警察とあったので意味は理解できたけれど、ドイツ語は肩身が狭そうだった。

警察分署の中は、以前と同じ秩序警察の緑の制服を着た人が何人かいたけれど、寒々しいほど閑散としていた。壁には「求む人員 求む真の警察官 今こそ正義の人民警察設立を！ 自由ド

イツ国民委員会」と書いた紙が貼つてある。

戦争が終わつた後、親衛隊や警察をはじめ、ナチス党員は連合国軍が戦犯収容所に連行したの
で、どこの警察署も人員不足だという話を思い出した。その代わりなのか、それともドイツ人の
監視役なのか、軍服姿のロシア人があちこちにいて、一切笑うことなく唇を固く結び、目を光ら
せていた。

建物の内部は薄暗いものの、電気は通っていた。正面の壁に取り付けられた細長い蛍光灯はい
かにも息絶え絶えといった様子で明滅している。その下に、ぶかぶかの制服を着た頼りなさそう
な中年男性が、うつむいて書き物をしていた。ドブリギン大尉が声をかけると気の毒なくらいに
狼狽しながら、ずり下がった眼鏡をずりあげ「どうぞ奥へ、フロイライン」と促した。

靴音がやけに響く廊下を歩きながら、ドブリギン大尉は言った。

「あなたにはある人物の遺体を確認してもらいます。ミツテの検死所は爆撃されて使えないので、
ここに安置しているのですよ」

通されたのはホルマリンの刺激臭が充満する小部屋だった。中央に処置台が置かれ、上にかぶ
せられた緑色の覆いは、ここに誰かが横たわっているとわかる、人型に膨らんでいた。きつと私
の殺した赤軍兵だ——しかし、よく考えれば二ヶ月以上も前の遺体があるはずはなかった。
中央の処置台のそばには禿頭の男性が立っていた。すり切れた上着のポケットにはハサミが何
本か入っていたので、きつと医師なのだろうと見当をつけた。彼はぞんざいな仕事で緑の覆いを
取り去り、私は思わず「あっ」と声を上げた。

横たわった男性の遺体。その蠟人形のように硬く、生気の失せた顔と手足。処置台からはみ出しそうなほど大きな体、がっしりとした四角い顔、豊かな白髪。かすかに開いたまぶたから覗く薄茶色の瞳は、私が殺した赤軍兵のものではなかった。別の男、知っているドイツ人だ。

クリストフ。クリストフ・ローレンツ。
信じられない。

鷺鼻で唇は薄く、右顎の下には赤紫色の小さな痣がある。年齢は六十歳を過ぎてはいるはずだ。最近髭剃りでもしたのか、顎には細かな擦り傷があり、唇の横に白い泡のようなものがこびりついている。

「この男性が誰か知っているかい」

医師は東欧訛りのある声で私に訊ねてきた。

「はい、知っています」

「彼の名前と、彼との関係は？」

「名前はクリストフ・ローレンツです。関係は……私にとって、いわば恩人です。いつ、亡くなつたんですか」

「今日の昼だ。自宅で倒れた」

まるで心に、鎖でつないだ重い鉄の球をぶら下げられたような気分だった。

「……まさか自殺ですか」

「ドイツ人の自殺は確かに頻発しているがね、彼の場合それはあり得ない。詳しくは後で警察か

ら聞いてくれ」

後ろに控えていた大尉から廊下で待つように命じられ、私はよろめく足をひきずって外に出る。途端に胃が猛烈にむかつき、私は慌ててトイレへ駆け込もうとするも間に合わず、廊下の隅に酸っぱい胃液を吐いた。

まさか——まさか死ぬなんて。息が苦しく、壁に手をついたままずると床にうずくまる。

あの憎らしい赤軍兵の遺体が現れてくれた方が、まだ良かったです。タイル張りの床はひんやりと冷たくて、夏なのに寒気で体が震えた。

私は彼がなぜこんなところにいるのか理解できなかった。なぜソ連の管理区域に？ ローレンツ夫妻の住まいは、ここからずいぶん離れたシャルロットテンブルク地区だった。空襲で邸宅が燃えたのはよく知っている。でも、その後も馴れ親しんだ西側の家を見つけて暮らしているとはかり思い込んでいた。

ドブリギン大尉はすぐに安置室から出てきて、床に座りこんだ私の腕をそっと、しかし振りほどけない程度にはしっかりと握り、階段を上がった奥の部屋へといざなった。黒いドアの前には大柄な女性、赤軍の軍服をワンピースに仕立てたものを着た軍人が立っていて、大尉と目配せし合いドアノブを押し開ける。

通された部屋は廊下よりも暗く、中央の机の上のデスクライト以外に光はなかった。机には黒髪をびっちり横になでつけた、痩せぎすのドイツ人警察官が座っており、鉛筆を走らせ何かをしたためている。ドブリギン大尉がドアを閉めると、警察官は顔を上げた。眼鏡のレンズにライ

トが反射して、トンボの複眼のように感情が読み取れない。

「座って下さい」

私は黙って向かいに座り、大尉は警察官側に回って椅子に腰掛けた。

壁にかかった肖像画はもはやヒトラー総統ではなくスターリンで、もっさりした口髭の新しい指導者が虚空を見つめていた。この部屋はどう見ても取り調べ室だ。緊張で口の中が渴いて仕方がない。

「これは尋問でしょうか？」

すると警察官はちびた鉛筆の先をぺろりと舐め、淡々と答えた。

「いえ、簡単な質問をしたいだけです」

たつぷり脂汗をかいていると悟られないように、私はそつとスカートに手のひらをこすりつけた。

「フロイライン・アウグステ。昨日と今日、どこで何をしていたか教えて下さい」

「ずっと働いていました。ダーレム地区ガリー通りの兵員食堂、フイフティ・スターズで、朝八時から夜十時過ぎまで」

就労証明書を見せると、警察官は眼鏡をずらし口を半開きにしながら書類を読んだ。横を向いたので眼鏡のつるを補修した跡が見えた。

「確認しました、お返しします。仕事中に外出などは？」

「そんな暇はありません。食事も厨房でまかないを食べているくらいです」

「出勤前と退勤後はどこにいましたか？」

「家と仕事場の往復です。朝起きて、一キロメートルほど離れた仕事場へ歩いて向かい、一日中働いて、くたくたになって帰宅したらすぐ眠ってしまいます。勤めはじめてから五日ほどですが、判で捺したように同じ生活です」

「この仕事につく前はどこにいましたか？」

「アレクサンダー広場近くにあった野戦病院で手伝いをしていました」

「あなたは看護師？」

「違います。ただ、その……市街戦で負傷して、回復した後も行くところがないので、そのまま看護師の真似ごとをしたんです」

「負傷」と言うにとどめたけれど実際は、赤軍兵とのあつた後に感染症で倒れ、病院で目を覚ましたのだった。幸い警察官はそれ以上追及してこなかった。

「わかりました。それで今月の八日にアメリカ軍がやって来てから、すぐ雇用を申請したということですね。リヒターフェルデの米独雇用事務所？」

「私は領いた。これ以上何も聞かずに解放してほしい。しかし残念ながらそうはならなかった。」「クリストフ・ローレンツ氏と最後に会ったのはいつですか？」

「つま先でタイル張りの床を引っ搔くようにして足を組み替え、私は天井を睨んだ。」

「少し待って下さい、思い出しますから」

「本当のところ、思い出すだけなら造作もなかった。しかし頭が混乱してなかなかうまくいかな

い。鼻の奥がつんとして、油断すると涙が溢れてしまいそうだ。クリストフの遺体を目のあたりにしてから叫びたい衝動を堪えるのに必死だったし、警察に語るにはありつただけの勇気が必要だった。幼かったイーダや両親の顔が脳裏に浮かんでは消え浮かんでは消える。まるで私を呼んでいるかのように。

それでもどうにか言葉をかき集め、私はひと呼吸置いて説明をはじめた。

「……確か、二年くらい前です。空襲が激しくなる直前に別れました。イーダが隠れ家で亡くなったので、私はもうクリストフとフレデリカの家にいる必要がなくなりましたから」

「イーダというのは？」

「ポーランド人労働者の少女です」

「なるほど。ローレンツ夫妻が戦争中にナチスの迫害から潜伏者を匿かくまっていたのはこちらも把握しています。あなたはそのイーダという名の少女を夫妻に預けたわけですね。いったいどういう経緯で？」

「イーダは迷子でした。父と勤務先の工場から一緒に帰る最中に、たまたま見つけたんです。私はアツカー通りに住む労働者の娘で、近くには外国人労働者たちの集団収容施設ゲッテルがありました」

「そう、あれは一九四三年がはじまったばかりの真冬のことだった。深い霧が出て、寒い夜だった。戦争の旗色が悪くなっているのは、配給品が一層少なくなり、ほんの少しの贅ぜい沢もできなくなつたあたりから、みんななんとなく察していた。占領地からやってきた外国人労働者はますます増え、私が手伝いをしていた工場でも大勢が働いていた。

「あの夜、イーダはひと気のない教会の前にほんやりと立っていました。傍らには車に轢かれたらしい女性が倒れていて——たぶん母親だろうと思いますが、すぐに亡くなりました。胸にポーランド総督府から来た労働者を示す『P』の布バッジをつけて。イーダはまだ子どもでした」

すると警察官はいったん鉛筆を走らせる手を止めて、私を見た。

「子ども？ ポーランド総督府からの強制労働者は、十六歳以上という決まりでは？」

「ええ、そうです。でもイーダは実際、十歳そこそこだったと思います。私の父は、イーダの母親がどうかか誤魔化して連れてきたのではと推測しました。大量に移送されてきた時期でしたし、イーダは失明していて……ひよっとしたらラーゲルで監督官にばれて、逃げる途中だったのかもしれません。とにかく父と私は、もしこのままラーゲルに戻したらこの子は処分されると考えました。それで、密かに保護したんです」

党——ナチスは、犯罪者のいない美しい民族フォルクスゲマインシャフト、共同体ゲマインシャフトを作るために、たくさんの人を迫害の対象にした。ユダヤ人はもちろん、スラヴ人やポーランド人、ツイゴイナー（ロマと呼ばれる人々を指す当時の蔑称）に共産党員、病人や障害者、などなど。私と両親は人種調査局が発行した正式なアーリア人種の血統証明書と、驚章判付きのドイツ国籍証明書を持っていたけれど、父は政治犯として処刑されたし、母は連行される前に自ら命を絶った。

祖母もきょうだいな私にとって、イーダは最後に残されたたったひとりの身内だった。でも結局、守れなかった。

「イーダはしばらくの間一緒に暮らし、私にとって妹のような存在になりました。でも、私の両

親がゲシユタポに狙われ、彼女を家で匿うのが難しくなつたので、フォルクスビューネ裏の書店を通じて地下活動家を頼つたんです。その潜伏先が、フレデリカの所有する船小屋でした」

「しかし亡くなつたと」

「ええ」

「お気の毒に」

私はため息を抑えられなかった。船小屋の湿つた床板に敷かれた薄い毛布の上に寝かされた、斑点だらけになってしまった小さくて細い体が、記憶にこびりついて離れない。このまま感傷に浸り、机に突っ伏して泣くことができたなら、どんなによかつただろう。

しかしその時、これまでずっと沈黙を守つてやりとりを見ていたドブリギン大尉が、さつと手を動かし、デスクライトを私に向けた。眩まぶしい。眩まぶしくて目を開けられない。それで悼む気持ち
が散り、私は現実引き戻された。

「イーダという少女はなぜ亡くなつたのです？」

ドブリギン大尉の口調は穏やかではあつたが、明らかに尋問がはじまつていた。

「病気です。私も何度か食事を運ぶのを手伝いましたが、気づいた時にはもう」

ドブリギン大尉は合図で警察官を脇に引かせると、机に両手をつき、私の真正面に立った。ライトの強い光に浮かび上がったその痩せた顔に、ぞつと寒気が走る。

「あなたはまだ、クリストフ・ローレンツ氏の死因を知りませんでしたね」

「……はい、何も」

「そうでしょうね。彼は歯磨き粉で亡くなったんですよ」

かすかに微笑みながら言う大尉に、私はどう答えればいいかわからず、間拔けな鸚鵡返しになった。

「歯磨き粉、ですか」

「驚くでしょう。歯磨き粉で人が死ぬなんて、私も聞いたことがありません。しかし笑いごとではないのですよ。現実にはクリストフ・ローレンツは、歯ブラシに絞り出した歯磨き粉を口に含んだ瞬間に事切れたのですから。プレントラウアーベルクの自宅で、妻フレデリカ・ローレンツの目の前で。歯磨き粉には青酸が混ぜ込まれていました。先ほど医師がお話したとおり、このことから自殺は考えられません。首を吊ったり飛び下りたりすればすぐに死ぬるのに、わざわざ歯磨き粉に毒を仕込んで死ぬ人間がいるでしょうか。それに、この物不足の街で、どうやって歯磨き粉を手に入れたのかという疑問が湧きませんか？」

ドブリギン大尉はそう言って、私の目をひたりと見据えた。

ここに連れてこられた意味がようやくわかった。何か言わなければ。しかし声が出なかった。水がほしい。唾を飲み込もうにも口の中はからからだった。

大尉は上体を起こすとさっと手を挙げ、後ろに向かって合図した。すると奥の壁の一部分が、ふいにするりと横にずれた。室内の暗さにまるで気づかなかったけれど、隣室と繋がる隠し窓になつていたので。

窓扉が開かれたガラス張りの隠し窓に、先ほど威嚇射撃をした、あの背の高い下級軍曹に伴わ

れて、ひとりの女性が姿を現した。記憶の中の彼女とはずいぶん違っていたけれど、間違いない。

「フレデリカ」

クリストフの妻、フレデリカだ。以前はぼっちゃりとして肉付きがよかったのに、今は見る影もないほど痩せ、裕福で上品だった婦人の面影は消え失せてしまった。フレデリカは私と目が合うと、さっと視線を落としてしまった。ドブリギン大尉のひどく冷徹で淡々とした声が耳に響く。「フレデリカ・ローレンツは通報者であり、夫殺しの疑惑もかけられています。あなたはどうか思いますか、フロイライン・アウグステ・ニツケル？ 彼女は夫を殺すような人物でしょうか」

ドブリギン大尉は体を横にずらし、隠し窓がよりはっきり見えた。ガラスに光が反射して、私自身が窓に映り込み、フレデリカの隣に立っているようだった。

「私は」声がかすれ、咳払いをした。「フレデリカとも最近はお会いしていませんでした。今はどこに住んでいるのかすら知らなかったくらいです。だから、わかりません」

「ならば、あなたが会っていた頃の夫妻はどうだったか答えて下さい。ふたりは親しかったですか？ 揉めごとなどは？」

「普通の夫妻だったと思います」

「普通とは？」

ドブリギン大尉は片眉を持ち上げ、口調は少し苛立ちいらだちを帯びはじめていた。

「つまり、その……險悪ではありませんでした。クリストフはチェロの演奏家でしたが、フレデリカは彼の才能と寡黙さを尊重しているように見えましたし、クリストフも裕福な妻を羨うらやまずに、

明るい彼女を愛していたと思います」

夫妻はシャルロットテンブルクの賑やかな繁華街や工場街から外れた、湖畔近くの静かな地区に住んでいた。聞いた話では家はクリストフのものでなく、プロイセン貴族の血を引く一家の末娘であるフレデリカの持ち物だった。ベルリンで特に富裕層が暮らす南西部よりもシャルロットテンブルクを選んだのは、その方が音楽や文化に触れられるからだそうだ。演奏家で内向的なクリストフと、もてなし上手で社交的なフレデリカ。夫妻は表向きはナチス高官のお気に入り、裏では潜伏者に所有している家や小屋を貸す地下活動家という、二重生活を送っていた。しかし二年前の空襲で邸宅も焼け落ちた。私がふたりの家を出たのはその直前のことだった。

「それにフレデリカが人を殺すだなんて想像もつきません」

「つまり、クリストフの死にはフレデリカは関わっていないと」

「はい、そう思います」

「慈善家であろうと、衝動に駆られれば人を殺すこともあるのでは？」

「……そうおっしゃられても。私の知るフレデリカのことをお話ししたままでです」

「わかりました。では少し河岸かを変えてみましょう。クリストフが使った毒入りの歯磨き粉ですが、アメリカ製の「対欧州逸金組合コルゲート」だったのです。これはCAREパッケージと呼ばれる支給品に

含まれているそうですね——あなたもご存知でしょう。アメリカ軍に従事するドイツ人に配られる報酬ですから。ベルリンの一般市民にとっては、きつと黄金ほども価値があるものでしょうね。歯磨き粉は石鹼以上に贅沢品ですし、とりわけアメリカ製とあっては、品質も安定しているでし

ようから。

ところで、あなたもコルゲートを支給されましたか？」

矛先がついにこちらに向いた。

「……はい。今月は給与が出ない代わりに、前払いとして同僚と山分けしました。その中に、確かにコルゲートがありました」

「今も持っていますか？」

「いいえ……闇市で売ってしまいました。あなたがおっしゃるとおり、高く売れるからです。実際、そのお金で久々に買い物をしました。この革靴です。男物ですけど、これで大事なものをなくさずにすみますから」

「いつ？ 歯磨き粉を売った相手はどんな人物でしたか？」

「闇市に行ったのは八日です。相手はよく覚えてません。男性だったと思います」

「男性だったと思う、ですか。風貌は？ 背は高い？ 低い？」

「ごく普通の人です。背は高かったと思いますが」

「ドイツ人ですか？」

「……ええ、おそらくは。これが重要なことですか？」

「もちろんです。しかしおかしいですね。CAREパッケージの支給からそう日は経っていないはずですが、覚えてらっしゃらないなんて。本当に売ったんですか？」

ドブリギン大尉のあからさまな尋問に、私は噛みつくように歯をむき出して答えた。

「売ったと言っているでしょう！ 他にも売る物がありましたし、混んでいたので誰に何を売ったかなんて覚えてはいる暇はありません！ まさか私を疑っているんですか？」

「あなたが殺したのではありませんか？」

隣室と繋がった窓の向こうには、まだフレデリカが立っていた。彼女の老いた顔も、ガラスに反射した私自身も、ひどく色の悪い顔をしている。

私は深く息を吸って吐き、慎重に言葉を選んだ。

「なぜ私が恩人を殺さなければならぬんです？」

「フレデリカはあなたには動機があると言っていました。自分たちが潜伏させ、匿いきれずに亡くなった者の身内で生き残っているのはあなたくらいだから、と」

その言葉は振り下ろされたハンマーのように重く、痛かった。

考えてみればわかりきった話だった。誰かが名前を警察に教えたから、私は今ここにいるのだ。その誰かはフレデリカにはかならない。私の居場所をソ連側が把握するのも、さほど難しくなかったはずだ。何しろ私が英語を学び、アメリカに憧れていたことを、フレデリカもよく知っていたから。生きていればきっとアメリカ管理区域にいると踏んで警察に伝えた。あとはドブリギン大尉がアメリカ軍政府に依頼すれば、憲兵は住民登録簿や雇用書類を探し、兵員食堂の職員リストに私の名前を見つけたに違いない。まったく私って、なんて鈍くて間抜けなのだろう。震える手でスカートを握り、冷静になるよう自分自身に言い聞かせ、どうにか言葉を探す。

「つまり、私がイーダの死の逆恨みでクリストフを殺したとおっしゃるんですか？」

声の震えは抑えられなかったけれど、聞きたいことは言えた。

するとドブリギン大尉は満足そうに微笑み、再び手を挙げた。それを合図に窓扉が閉められ、フレデリカはいなくなり、暗くなった窓ガラスには私の白い顔だけが残った。

椅子に腰掛けた大尉の振る舞いは、紳士らしいものに戻り、デスクライトの位置を戻しながら優しげな口調で言った。

「脅して申し訳ありませんでした。私は、あなたは潔白だと思っています」

「……信じられません。あなたは私を犯人だと思ってるでしょう。そうでなかったら私をわざわざ捜してまで連行しなかったはずですよ」

「疑うならご自由に。しかし実際、あなたのお話を伺って、無実だと確信したままでですよ。それとも疑ってほしいのですか？」

「そういうわけでは」

「お気持ちには理解しますとお伝えしましょう。こちらとしては、ドイツの新米警察官に我々のやり方を学んでもらう必要もありましてね。監獄からナチのファシストどもが戻ってくる前に、同志スターリンに忠実な警察官を育成しておく必要があります。人員は道を共にする共産黨員や労働組合員から再構成するつもりですが、素人は素人なので——しかも、どうやら治安警察シツツポリツァイはイギリスにすり寄ろうとしていているようですね。そうなる前に人民警察を確立せねば。ベルリンはソヴェエトのものだ」

隣で書き物続けている眼鏡の警察官の鉛筆がぼきりと折れる音がした。